

# 中国画顔料の研究〔1〕

于 非 闇 著

服部匡延 訳注

## 訳者まえがき

**原書について** 本書の原題は『中国画顔色の研究』といい、1955年2月北京の朝花美術出版社から出版されている。しかし本訳稿では1957年8月発行の3刷本を使用した。とくに意味はない。

本書の体裁はほぼA5判、目次5ページ、本文78ページ。ほとんど小冊子と呼んでいいほどであるが、その内容は、のちに触れるように中国絵画の今古にわたり、各種顔料の産地や性質などから使用方法にまで及ぶ総合的・網羅的著述であって、この種のものとして中国ではおそらくはじめて書かれた研究書と称してよく、しかも管見の限りではあるけれども、またおそらく本書を除いて他にはない。その記述一つひとつの当否はさておき、本書が中国絵画・絵画史理解の一助として果す役割りは大きいものがあると思う。

**本書の構成について** 本書の内容を、その目次の構成によってうかがうと、以下の通りである。さしあたり、その章節だけ原題によって標記しておこう。

- 第1章 中国画顔色の品種及性質
  - 叙 説
  - 第1節 礦物質顔料
  - 第2節 植物質顔料
  - 第3節 金銀
  - 第4節 膠礬
- 第2章 中国画顔色発展的情况
- 第3章 中国墨的特色
  - 第1節 我們如何選購用墨
  - 第2節 使用墨時应有的認識
- 第4章 民間画工使用顔色的情况
  - 第1節 画像彩画用色
  - 第2節 年画灯画用色

## 第5章 古代画家着色及研漂使用顔色的方法

- 第1節 伝統上の着色方法
- 第2節 古代画家對於顔料的選択
- 第3節 古代画家留伝の研漂方法
- 第4節 古代画家使用顔色的方法

## 第6章 現代国画家研漂及使用顔色的方法

- 第1節 研漂方法
- 第2節 使用方法

**原著者について** 于非闇氏の経歴についてはよくわからないが、同氏が1957年、北京の人民美術出版社から出版した『我怎樣画工筆花鳥画』なる細密花鳥画の技法書の冒頭に書いているところによると、1935年、46才のとき花鳥画を修業しはじめた晩学の画家であることが知られる。とすれば、存生ならば1981年現在、91あるいは92才のはずである。いまなお調査中なので、これ以上のことは今後に俟ちたい。

**訳出について** 本書全部の訳稿はかなりの数量になるので、適当に区切って継続的に訳出し、今回は枚数の都合で第1章・第1節について掲載した。なお訳者補注は範囲を顔料関係にしぼり、作家・作品などについてはおおむね割愛した。

## 凡 例

本文および原注における訳者の補記は〔 〕で括り、また訳者補注番号も〔 〕に入れた。ただし、補注における自注は（ ）とし、引用文の注記は〔 〕に入れた。

# 中国 画 顔 料 の 研 究

## 第1章 中国 画 顔 料 の 品 種 と 性 質 叙 説

中国の絵画は輝かしい悠久の歴史をもち、数千年来、多くの画家たちの研鑽と創意を通して独特な形式と風格をつくりあげてきた。幅ひろく豊富な経験が遺されてきたが、よくわれわれが科学的姿勢をもち、分析批判し接受するならば、わが国の民族的絵画の伝統を發揮し、個有の形式をもった現実主義的な作品を創造することに益するところ大なるものがある。民族絵画の遺産を接受する際、画材と技法の独自性に関する理解もまたゆるがせにできず、したがって、これまで中国画に使用されてきた顔料をどのように認識し使用するかが、当然重要な課題となる。それは中国画の物質的基盤の一つであり、わが個有形式をもった芸術の創造のために重要なはたらきをし、しかも目下のところ美術家は、すくなくからずわが国の優れた伝統的絵画の顔料にほとんど通じていない。こうした情況はわれわれの「推陳出新、百花齊放〔伝統を生かして創意を出し、あらゆる文化・芸術の発展を促進する〕』という活動にも、ある程度ひびくにちがいない。

今日、われわれはなおすくなくからざる古代彩色画をみることができ、重要なものとしては遼陽〔遼寧〕、望都〔河北〕など漢墓の壁画、西北各地〔甘肅省、新疆ウイグル自治区など〕の石窟壁画および隋・展子虔の「遊春図」(故宮博物院〔北京、以下同じ〕蔵)、唐・周昉の「簪花仕女図」(東北博物館〔瀋陽〕蔵)、五代・顧闳中の「韓熙載夜宴図」(故宮博物院蔵)、宋・趙佶〔徽宗〕の「芙蓉錦鷄」(故宮博物院蔵)などで、これら作品はいまから遠くて2,000年前後、近くても800~900年であるが、画面の色彩はなお一定の美しさを保っており、さらにはいろいろな色調や気分をもそなえていて、古代画家の顔料処理能力をはっきりと示している。

いまから1,400年あまり前、画家の謝赫が「六法」<sup>(1)</sup>を述べたなかで「随類賦彩〔描く対象に色彩をほどき〕」の理論を提唱したことが文献にみえる。いまから1,100年あまり前、美術批評家

・張彦遠は著書『歴代名画記』<sup>(2)</sup>のなかで、当時の顔料産地、使用の情況および永年変化しない理由について述べている。その後、実践を通して、顔料を使用した経験を多少とも書きとめた画家が各時代すくなくなく、これらの資料も中国画の顔料問題に対して高い価値をもっているのである。

### 第1節 鉱物質顔料

#### 1 赤 色

甲 朱砂<sup>(2)</sup>また辰砂<sup>(3)</sup>ともいい、輝閃鉱類に属する。主要成分は硫化水銀(分子式HgSO)である。石灰岩中にでき、塊状、柱状、板状、馬牙状<sup>(4)</sup>、箭頭状<sup>(5)</sup>をしている。わが国の主要な産地は湖南省の鳳凰県・晃県・麻陽県・乾城県〔いま〕、貴州省の玉屏県・畢節県・貴筑県・安順県、四川省の西陽県・秀山県・彭水県、雲南省の保山県・大理県などの地に分布している。表面が鏡のように光る天然の朱砂が最高である。すでに精煉して水銀を採取してしまったものは、絵画の顔料にしない方がいい<sup>(6)</sup>。

乙 朱標<sup>(7)</sup>朱砂をこまかく磨りおろして、うすい膠水に混ぜると浮き上がってくる、黄丹にくらべてもうすこし紅いものを朱標という。(標は標と書いてもいいが、標は朱砂の上に浮いた油脂のような部分、標は浮き出た部分〔の全体〕を指す。しかし、どちらでも意味は通じる。)

丙 銀朱 紫粉霜ともいう。これは、わが国古代において、もっともはやく發明された化学顔料である。従来製の法は水銀1斤、石亭脂(薬名。製造した硫黄<sup>(8)</sup>)2斤<sup>(9)</sup>を一緒に磨って大口の甕に入れ、上は鉄鍋で蓋をし、さらに針金で鍋と甕をしっかりとしばって塩泥で密封し、鉄製の棚にのせて下から炭火であぶる。その際、棕櫚のブラシに冷水をふくませ、あぶっている間かぶせてある鉄鍋を濡らしつづけ、およそ一時間するとできあがる。冷えるのを待って鉄鍋をとると、鍋と甕の内側にべったり銀朱ができ、石亭脂はそのまま甕の底に溜っている。水銀1斤で銀朱が14両とれる。アヘン戦争〔1840〕以後、海運が盛んとなり、水銀が流出し値段も高騰したので、それからつくる銀朱は

めっきりすくなくなつた。主要産地は福建省漳州〔市〕である。現在では1包（重さ1両）の銀朱さえ、求めることはむづかしい。いまは「一硫化水銀」で代用する。<sup>(10)</sup>

丁 赭石<sup>(11)</sup>土朱ともいい、火成のもの、水成のものがある。絵画用の赭石は赤鉄鉱中のできる。原石は赤鉄鉱と一緒に産出されるのであるが、手で撫でてみて、しっとりとなめらかな感じのものがいい原料である。もともと山西省雁門一帯に産したが、むかし代郡〔代嶺<sup>(11)</sup>〕に属していたので、また「代赭」ともいう。赤鉄鉱あるところ、すべて赭石を産する。<sup>(12)</sup>

戊 黄丹<sup>(13)</sup>漳丹ともいい、福建省の漳州に産する。現在、各顔料店で扱っている。製法は鉛粉を製した残りの鉛を、さらに火に通すとすく黄丹となる。<sup>(14)</sup>

## 2 黄色

石黄・雄黄・雌黄・土黄は色の濃淡によって区別されたもので、実際にはみな一緒に産出する。成分は三硫化砷素（分子式 $As_2S_3$ ）で、石黄は純黄色、雄黄は橙色がかつた黄色、雌黄は黄金色、土黄はカーキ色をしている。主な産地は甘肅省であるが、別格として湖南省には世界最大の雄黄鉱山がある。<sup>(15)</sup>この4種はいずれも鉛粉との同用を嫌う。

甲 石黄<sup>(16)</sup>黄金石ともいう。外側の、ざらざらして黒ずみ臭みのあるところは駄目で、内側の多少の厚みがまともな石黄である。

乙 雄黄<sup>(17)</sup>黄金石の内部にあつて純黄色にくるまっているか、あるいはまるまる塊りになっている。また、すこし光沢があつて、さらに色の濃いものを雄精という。

丙 雌黄<sup>(18)</sup>雌黄も黄金石のなかにでき、ちょうど雲母のように薄片をなしており、たやすく碎ける。ために俗に「四両の雌黄、千層の金片<sup>(19)</sup>」という諺がある。

丁 土黄<sup>(20)</sup>これは黄金石の外側を包んで、臭いのもっとも強いカーキ色〔の部分〕である。前の三種も、じつはみな多少の臭みはあるのである。主成分は酸化鉄および水酸化鉄（分子式 $Fe_2O_3 \cdot 3H_2O$ ）で、残りは陶土である。

## 3 青色

梁の陶宏景〔宏は一般に 弘と書く〕（画家で、また薬学家で

もある。452～536年）は『名医別録』のなかで「空青は銅あるところに生ず<sup>(21)</sup>」といっているが、これは近代の学者が、石青は塩基性炭酸銅（分子式 $3CuO \cdot 2CO_2 \cdot H_2O$ ）で赤銅礦<sup>(22)</sup>から産するとしていることと一致している。その種類には空青・扁青・曾青・白青・沙青の五種あるが、いずれも有毒である。以下、分けて述べよう。

甲 空青<sup>(23)</sup>塊りの状態は楊梅に似ている。宋・蘇頌（1058年前後）によると「いま、饒州・信州<sup>(24)</sup>にときにこれあり。状、楊梅のごとし。その腹、中空にして、これを破るに漿あり。絶えて得がたし」という（『図経本草』）。北宋以前の医家や画家はよく空青のはなしをしていて、それが金礦から出るとか銅礦から出るとかいつている。わたしはいちど、四川省産で形が楊梅の実に似た石青をみたことがあるが、なかはずこしばかり空隙があるだけで漿水はなく、それほど使えるものではなかつた。<sup>(25)</sup>

乙 扁青<sup>(26)</sup>大青ともいい、雲南や緬甸〔ビルマ<sup>(26)</sup>〕に産する。雲南に産するものは滇青〔滇は雲南<sup>(26)</sup>〕といい、ビルマのものは甸青という。清の王槩がいった梅花片石青とはこれである（『芥子園画伝』〔三集巻末 設色譜法〕）。ビルマ産のは塊りがいちだん大きい、滇青の嬌艶なるには及ばない。<sup>(27)</sup>

丙 曾青<sup>(28)</sup>（曾は一層二層の層と解すべきであろう）。層によって濃淡があつたり、あるいは数層にわたつて濃い青色をしている。画家は淡青色のものを愛用するが、それを集めて精製したものを天青という。山西省・湖南省・四川省・西康省〔いまは廃止されて、四川省・西 蔵自治区などに編入された。〕・西藏〔自治区〕に産する。<sup>(29)</sup>

丁 白青<sup>(30)</sup>碧青ともいい、雲南省・貴州省・四川省に産する。天青よりさらに淡くて光沢もなく、画家はほとんど使用しない。<sup>(31)</sup>

戊 沙青<sup>(32)</sup>また仏青といい、回青ともいつて西域伝来の顔料である。敦煌の壁画、明・清の仏像はいうまでもなく、仏教絵画や建築の彩画に沙青が普通使われている。沙青は粗沙と細沙の二種に分けられるが、粗沙は米粒ほどの大きさ、細沙は粉末ほどではないが、より小さく、1包は重さ48両である。現在、西康・西藏・新疆〔ウイグル自治区〕などで依然産出してい

る。民間の画工は西藏産のものを「蔵青」としている。

#### 4 緑色

宋・茫成大の『桂海虞衡志』に「〔石〕緑は〔銅の苗なり。広西〕右江の銅あるところより出づ。石中に生じ、質の石の〔ごとき〕ものを石緑と名づく。また一種脆爛なること碎土のごときものあり、泥緑と名づく〔品もつとも下る〕』といている。これはまた、いま、石緑( $2\text{CuO}\cdot\text{CO}_2\cdot\text{H}_2\text{O}$ )は銅礦<sup>(33)</sup>中から産するといっていることと一致している。いずれも有毒である。4種に分けて述べる。

甲 石緑<sup>(34)</sup>塊りをなしている。雲南省の会沢県・東川県・貢山県産のものが最高で、広西〔壮族自治区〕の南丹県・賓陽県のものはやや劣る。さらに波斯・ヒルマでも大塊の石緑を産する。<sup>(35)</sup>

乙 孔雀石 これも塊りである。濃淡あいなかばする自然の模様があり、孔雀の羽毛の翠緑色によく似ている。わが国の西北〔地域〕やマレー半島から産出する。民間の工芸品では、彫りものや象嵌の装飾にこれを使っている。細かく砕いて緑色の顔料とする。

丙 銅緑<sup>(36)</sup>銅青ともいい、日光に強いのが特点である。これにも、銅礦中に天然にできるものがある。<sup>(37)</sup>従来の人造製法は「黄銅をたたいて板にし、一晚酢につけて糠のなかに入れて置く。それをとろ火であぶって銅緑を削りとる」というものであった。これもわが国の人びとがもっとも早く発明した化学顔料である<sup>(38)</sup>(〔明の〕李時珍著『本草綱目』〔銅青〕1590年刊と〔明の〕宋応星著『天工開物』〔卷下・丹青の付記〕1637年刊をみよ)。現在の製法は、胆礬〔硫酸銅〕の溶液に炭酸ナトリウムを加えて、沈澱したものを採取するのである。

丁 沙緑 西藏と波斯国に産する。沙のような粒をしていて、色はやや濃くて暗い。

#### 5 白色

白色は中国画では大青・大緑と同じく、いずれも「重色」(淡着色に対していう)とされている。これには白堊・鉛粉・蛤粉がある。蛤粉は貝殻を焼成したものであるが、焼くと石灰質に変質するので、これも礦物質顔料のなかに入

れる。

甲 白堊<sup>(39)</sup>白土粉ともいう。成分は炭酸カルシウム(分子式 $\text{CaCO}_3$ )である。古代絵画ではたいへん重視されており、紀元536年以前では「画粉」(梁・陶宏景)と称していた。漢・魏以来、壁画の主要な材料である。白堊はどこにでもあるが、河北省・山西省・安徽省・河南省産<sup>(40)</sup>のものがよりいい。白堊は年月がたっても変色しない。(敦煌の北魏の壁画は、白堊に銀朱あるいは漳丹を混ぜて肌色を出し顔や手足を描いているが、銀朱や漳丹はのちに黒変し白堊も影響を受けてしまっている)。

乙 鉛粉<sup>(41)</sup>胡粉・官粉・垂鉛華ともいう。成分は塩基性炭酸鉛(分子式 $2\text{PbCO}_3\cdot\text{Pb}(\text{OH})_2$ )で、これまで女性が顔に塗っていたおしろいである。それを銀錠〔明・清時代、通貨に用いた錢頭形の銀塊〕の形につくったので錠粉ともいう。これまた、古代わが国が化学的方法をもって製造した顔料である。一説には、漢の張騫が西域に使用した折り将来した方法という。製法は、鉛百斤を溶かして薄板とし、捲いて鉛筒にする。それを木桶に入れ、桶の底となかほどに各おの酢1瓶を置き、しっかり蓋をして泥と紙で密封して、なかの気が洩れないようにする。それからこんろで煨め七日たつて蓋を開くと、鉛筒にびっしりと霜のような白粉を吹いているから、それを囊に掃きとる。ふたたび鉛筒を桶に入れ、前のようにして〔白粉を〕つくり、鉛がつきたところで終りとする。白粉1斤を掃きとるごとに、〔大〕豆粉2両・蛤粉4両を混ぜると鉛粉ができるのである。<sup>(42)</sup>鉛粉はストーブのなかに入れたりすると、またもとの鉛に返ってしまう。鉛粉を使った絵画は、日がたつと黒変するが、これを「返鉛」としている。〔しかし〕いちど過酸化水素水〔オキシジ〕で軽く洗ってやると白色にもどる。

丙 蛤粉<sup>(43)</sup>珍朱粉ともいい、これもまた古代の中国画に重用された顔料である。宋代の絵画は、白堊のかわりに蛤粉を用いている。製法は、殻が厚くて堅く、殻縁がかすかに紫紅色を帯びているものを精選し、とろ火で焼くと石灰質となるから、〔それを〕極くこまかく磨って白粉とし、水を注ぐと生石灰(貝灰)から消石灰に変ずる。膠を混ぜて使用すれば永久に変化

しない。

## 6 黒色

黒脂石<sup>(44)</sup>湖北省・湖南省に産する。薬用で、漢方薬店で買える。別に石墨ともいう。舐めると舌にねばりつく性質があるが、煤とは異っている。主要成分は炭〔素〕で、古代の画家は、これをこまかく磨って鬚や眉を描いたのである。

以上は現在常用されている礦物質顔料であるが、このほかの瑪瑙・珊瑚・宝石・松花石・琥珀などは、一般に使われない顔料なのでとくに述べないことをお許しいただく。

### 〈原注〉

(1) 六法 南齊の謝赫は、その著『古画品録』の序にいう。「画には六法があるが、これを兼備するものは稀れで、むかしもいまも人おのおの、その一法を善くするにすぎない。六法とはなにか。一は気韻（ある本では運とする）生動、二は骨法用筆、三は応物象（ある本は写とする）形、四は随類賦（ある本は敷とし、ある本は傳とする）彩、五は経営位置、六は伝移模（ある本は摸とする）写（ある本は「伝移摹写」とする）がこれである。惟だ陸探微、衛協だけは兼備している」と。

六法は中国古代の有名な絵画理論ではある。しかし、伝えられた版本は同じでなく（明刊本、叢書および各家引用の刊本）、字句も相異があり（前をみよ）、解釈も不同（唐・張彦遠著『歴代名画記』、宋・郭若虚著『図画見聞誌<sup>〔原注では〕</sup>』および後代の各解釈など）である。今日これについてどう考えるべきか、中国画研究の課題とするに値いしよう。研究の便とするため、とくに各本によって校勘を加えた次第である。前に引用した一節は『説郭』本、『百川学海』本を底本として摘録したのであるが、相異なる字句は『明刊歴代名画記』、『王氏画苑』、『津逮秘書』、『佩文齋書畫譜』、『芥子園画伝』、『古今図書集成』、『硯北偶鈔』、『美術叢書』、『中国絵画史』<sup>〔著者〕</sup>の各本を対照し、それぞれ括弧で字句の下に加え、もって六法研究の一参考資料とした。

(2) 唐・張彦遠の『歴代名画記』<sup>〔卷2-画体・工用〕</sup>に「職人はいい仕事をしようとするれば、かならず、まずその用具・材料から吟味してかかる。齊<sup>〔山東省〕</sup>の地の紉<sup>〔きぬ〕</sup>、呉<sup>〔江蘇省〕</sup>の地の練<sup>〔きぬ〕</sup>で織った氷のような素<sup>〔しろ〕</sup>や霧のような絹<sup>〔きぬ〕</sup>は、つやがなくてきめこまかく、機織技術の傑作である（これは絵画用の絹地を述べている）。武陵（湖南省常德県）<sup>(45)</sup>

の水井の丹〔沙・砂〕、磨嵯（福建省建県）<sup>(46)</sup>の〔丹〕沙、越崔<sup>〔西康省西昌県〕</sup>（四川省）の空青、蔚<sup>〔山西省〕</sup>（靈邱県）の曾青、武昌<sup>〔湖北省〕</sup>の扁青<sup>〔原注：1級〕</sup>、蜀郡<sup>〔四川省〕</sup>（成都市）の鉛華<sup>〔原注：黄丹なり〕</sup>、始興（広東省曲江県〔韶關市〕）の解錫は、磨りつぶして篩にかけ、濃淡・軽重・精粗を区別する。林邑（マレー半島）や崑崙<sup>〔インド〕</sup>の黄。<sup>〔胡椒粉と一緒には用いては〕</sup>、南海（広東省）の蟻針<sup>(47)</sup>紫針。粉胭脂<sup>〔粉胭脂をつくる。〕</sup>、雲中（山西省〔大同市〕）の鹿膠、呉中（江蘇省〔蘇州市〕）の鱧膠、東阿（山東省〔東阿県〕）の牛膠<sup>(48)</sup>

〔以上は〕彩色の用具、漆姑の汁<sup>(49)</sup>（〔漆姑〕草の名。また蜀羊泉ともいい漢方薬にする）は練ったり煎じたりし、ともに重ね塗り〔の顔料と〕して盛りあげて使用する。古画はみな漆姑の汁を用い、練ったり煎じたりしたものを鬱色と呼び、緑色の上に重ねて用いる。古画は頭緑・大青を使わない<sup>〔画家は粗い緑を頭緑、粗い青を大青と呼ぶ。〕</sup>その精華をとり出し、混えて用いている。百年伝致の膠（阿膠<sup>(50)</sup>は古いものを用い、新しいものは使わない）は千年たっても剥げないし（以上は顔料と用膠について述べたもの）、絶壁に住む食竹<sup>(51)</sup>〔ある種のり〕の毛筆でひいた線は剣のように鋭い。（この一節は筆のことを説いたもの）<sup>(52)</sup>これは遠く紀元847年のむかし、中国画の絹・顔料・膠・筆などの用具についての、もっとも早く、かつもっとも具体的でくわしい記述である。その説くところの顔料産地は、国の内外にわたっている。

### 〈補注〉

〔1〕 訳者まえがきで紹介したように、于非闇氏は「顔色」と用語している。この語には、いま「顔料」と「色彩」の意味があるが、于氏は別に「顔料」とも用語しているので、「顔色」はもうすこし幅をもった内容として使用されているのではないかと思うが、ひとまず、これも「顔料」と訳しておく。

〔2〕 朱砂 古くは丹または丹砂・丹沙などとして文献に出てくる。『尚書』禹貢にいう「荊州（天下九州の一つ。湖北・湖南に加えて、四川・貴州の一部を含む地域）の丹」や、秦・李斯の上奏文（『史記』にいう「西蜀〔四川省〕の丹青」など<sup>〔後掲・米〕</sup>）。『本草綱目』（巻）所引によれば『神農本草経』あるいは『名医別録』も丹砂と書いており、梁・陶弘景が「すなわち、いまの朱砂なり」と注したあたりから、朱砂が通用するようになったらしい。

〔3〕 辰砂 朱砂のうち、とくに辰州（湖南省沅陵県）に産するものを称した。北宋・蘇頌の『図経本草』<sup>〔本草綱目所引-以下同じ〕</sup>に「いま辰州・宜州〔広西壮族自治区宜山県〕・階州〔甘肅省〕に出づ、しかして辰砂を最（上）となす」とあるように、辰砂の名が広まり、ついに朱砂全体の別名となったものである。

〔4〕 馬牙状 原文は馬牙形。陶弘景（『本草綱目』所引-以下同じ）は

「栲搗子（さいろ）・紫石英の形のごときもの、これを馬齒砂という、また好し」という。唐・蘇恭の『唐本草（「新修本」）』（「本草綱目（所）」には、原石の塊りの「小なるものは杏仁のごとし。光明、雜（り）氣なきを馬牙砂と名づく。〈略〉薬および画に入（用）る。ともによし。」とある。

〔5〕 箭頭状 原文は箭頭形。劉宋・雷敦（こう）の『炮炙論（ほうせい）』（「本草綱目（所）」に「箭鉄砂」の名がみえ、また『唐本草』には、「〔塊りの〕小なるものは石榴子（ざくろ）のごとく、状は芙蓉、頭は箭鉄のごとし」とある。北宋寇宗奭（こうそうせき）の『本草衍義』（「本草綱目（所）」でも「晃州（湖南省）」出すところ、形は箭鉄のごとし」とあり、『本草綱目』の著者、李時珍自身も「丹砂は辰（州）・錦（州）をもって最（上）となす。麻陽（湖南省）はいにしえの錦州の地なり。佳なるものを箭鉄砂となす」とする。箭頭状の朱砂とは、これら箭鉄砂をいうのかも知れない。

〔6〕 于氏は辰州の地をあげていないが、同個所と乾城・鳳凰・麻陽・晃の各県は地続きで、湖南省の西辺にかたまっている。乾城・鳳凰・麻陽は古くは錦州の行政区域に属していたらしい。いずれも、唐・宋以来の伝統的鉍脈である。

四川省の朱砂は古くから著名で、すでに『名医別録』（「本草綱目（所）」に「丹砂は符陵の山谷に生ず」と書かれ、陶弘景は注して「符陵はこれ涪州にして蜀郡の南に接す」とする。涪州は四川省涪陵県の地である。于氏のあげた西陽・秀山・彭水諸県は、この涪陵からさらに東南へ向って、湖北・湖南・貴州各省の接合地域へ楔を打込んだ形の山地三角地帯の中央線を縫って、彭水・西陽・秀山の順で並んでいる。陶弘景はさらに続けて「いままた採るものなし」というが、この一帯はまさに「符陵の山谷」に当り、これまた古来からの鉍脈であった。上記のうち彭水は、かつて黔州（きん）といい、李時珍自身の注記にも出てくる。

雲南省の朱砂については、くわしいことは分らないが、明代には「雲南・波斯・西胡の〔丹〕砂は、ならびに光潔用うべし」（李時珍）として知られている。ちなみに、波斯はペルシア（イラン）のほか、マレー半島もしくは南海のどこかを指すことがある（今村与志雄氏「西陽雜俎」3「東洋文庫」247頁）が、ここにいう波斯はどちらとも判断しかねる。西胡も、漠然と「西方の異国」と解しておく。

また、貴州省の朱砂についても歴史的なことは分らない。

ここで、米沢嘉圃氏「中国古代における顔料の産地」

（『東洋文化研究所紀要』11・昭和31年11月以下「米沢論文」と略称）にまとめられている朱砂の時代順産地表を、若干補記して以下に掲げる。

先秦 荊州（前出）  
秦漢 涪陵（四川省） 『名医別録』に「丹砂は符陵の山谷に生ず」とあるが、米沢氏は李斯上奏文（前出）にみえた「西蜀の丹」がこれに当るとする。

六朝 武陵西川（湖南省沅陵および麻陽方面—米沢氏）。広州臨漳（広東省）。王屋山（山西省）。

『名医別録』の陶弘景注に「武陵（湖南省）の西川（沅江のこと）」、また「広州の臨漳」とある。沅江の上流域に朱砂産地が集中している。米沢論文では、梁・江淹の「扇上綵画賦」に「丹石は王屋の岫に発す」とあるのを引く。

唐 辰州・錦州・溪州（湖南省）・溱州（四川省）・宜州・連州（広東省）・越州（浙江省）・興州（陝西省）・このほか、米沢論文本文に、淑州（湖南省）・晃州・容州（広西壮族自治区）・春州（広東省）・信州（江西省）・金州（陝西省）・商州（陝西省）・階州などがある。加えて、『新唐書』（巻41・地理5）には黔州、同巻42に茂州（四川省）が産地としてあげられている。于氏があげた大部分の地名が、以上のなかに入っていないが、あるいは新しい時期の開発によるからかも知れない。

〔7〕 朱標については第5章、第3節に詳しく述べてあるが、要するに水飛（簸）による選別のうち、もっとも軽質の朱砂のことである。

〔8〕 石亭脂 『本草綱目』巻11・「石硫赤」の項目に、その別名として石亭脂をあげる。李時珍は「硫黄の赤色の多きもの」とし、「近世は通じて硫黄を呼びて石亭脂と為す」という。魏・呉晋（ききう）の『呉氏本草』（「本草綱目（所）」によれば、石亭脂は「羌道の山谷に生ず」とあるが、産出地は時代とともに増加していったであろう。羌道はいまの甘肅省西回県。これは天然のものと思われるが、于氏のいうのは人工の硫黄で、『天工開物』（下巻1）に「石亭脂すなわち硫黄の製造せるもの」といっているのと同じものである。具体的にはもう一段はつきりしない。

〔9〕 斤・両 いま1キログラムを1公斤というが、ここでは旧制の1斤=16両=約600グラムと解しておく。その場合、1両は100分である。

〔10〕 于氏の述べる銀朱製造法は、同様な記述が胡演（未詳）の『升鍊丹藥秘訣』（「本草綱目（所）」に極く簡単なものが、『天工開物』（下巻16）にくわしいのがみえる。

なお、水銀1斤から『升鍊丹藥秘訣』では朱14両8分、次朱3両5分できるとなっており、『天工開物』では朱14両と次朱3両5分となっているが、于氏

では次朱の分がない。省略したものか。前二者によって計算すると、水銀1斤から約17～8両の朱が採れることになるわけで、増量分の1～2両は『天工開物』のいう通り、硫黄との結果によって生じたものであるろう。

- [11] 『神農本草経』(「本草綱目」所)は代赭石と書き、須丸・血師・土朱・鉄朱などの別名がある。
- [12] 赭石は山西省のほか、古くは山東省も知られていた。『名医別録』に「代赭は斉国の山谷に生ず」とみえている。唐代では『唐本草』に「この石、多く代州より来る」と伝え、代赭が盛んに使われたらしいが、なお山東のものも流通し、「齊州(出東省)の亭山」産の赭石が記録されている。同書はまた、「靈州鳴沙(寧夏回族自治区中衛県)」をあげ、その産石は代・齊のものより大いに勝ると書いている。李時珍によると、宋代では虔州(江西省)が、歳ごとに万斤を貢したという。産地は、もとより時代とともに変遷・増加はあったはずで、かれのときまでには「赭石は処処にこれあり」ということになる。また、王嘉蔭氏は現在の産地として「雲南易門」を1例としてあげている(「本草綱目の礦物史料」(1957年科学出版社))。
- [13] 黄丹 『本草綱目』(巻8)鉛丹の積名に、別名として黄丹とあり、さらに丹粉・朱粉もあげる。『名医別録』に「鉛丹は鉛より生じ、蜀郡の平沢(霽)に生ず」とある。平沢は山谷に対して漠然と平地をいったものか。また『歴代名画記』にも「蜀郡の鉛華黄丹なり」と、同様なことが書いてある。李時珍によれば、鉛華を黄丹とするのは誤りで、鉛華は粉錫つまり胡粉だといっているが、『歴代名画記』では、別の個所で胡粉を解錫と明記しているから、唐代ではあるいは黄丹を鉛華ということもあったのではないか。
- [14] 黄丹の古典的製法は『天工開物』(下巻14)にくわしい記述がある。藪内清氏訳(「東洋文庫」本製錬の付記「黄丹」)を引くと、つぎのようである。

「焼いて鉛丹をつくるには、鉛1斤、土状の硫黄10両、硝石1両を用いる。鉛をとかして液状とし、酢を滴下する。わき立った時に一塊の硫黄を入れ、しばらくして硝石を少し入れる。沸きがおさまったところで、再び前のように酢を滴下し、漸次硝石と硫黄を入れて、粉末となるのを待つと丹ができる。胡粉をつくる時に残ったものは、硝石を礬石とて焼いて丹をつくり、酢を用いない。〈略〉」

- [15] 「米沢論文」を参照し雄黄と雌黄とに書き別けて、わたくしなりの書き方でその産地を掲げる。

#### 雄黄

六朝 武都仇池(甘肅省)・敦煌(甘肅省)・石門(湖南省)

石門(湖南省)・零陽(湖南省)・始興(広東省)。

唐 武都・石門・宕昌(広西壮族自治区、容県)宕州(甘肅省)。

#### 雌黄

六朝 武都仇池・于閼(新疆ウイグル自治区、和田県)・扶南(インドシナ)・林邑(インドシナ)。

唐 林邑・崑崙(インドシナ)。

上記のうち武都と武都(の)仇池は、同じ個所を指しているものと考えられる(「米沢論文」)。また、于氏は雄黄も雌黄も「一緒に産出する」といっているが、これで見ると、そうした場所もあるだろうが、やはり別べつに採られたらしい。

- [16] 石黄 和訓「きおう」。『本草綱目』(巻9)は雄黄を標記し、石黄・黄金石はその別名とし、熏黄の名も加えている。『唐本草』は黄金石は通称であって「石門に出づるものを石黄と名づく。またこれ雄黄なり」といい、辰砂と同様、産地名にもとづく名称とみている。またつづけて「石門のものは劣るとなすのみ。悪しきものを熏黄と名づく」ともいっている。唐・陳藏器の『本草拾遺』(「本草綱目」所)では「今の人、石黄中の精明なるものを敲き取りて雄黄となし、外(側)の黒きものを熏黄となす」とあり、于氏のいうところに近い。

- [17] 雄黄 和訓「おおう」また「おおおう」。日本で鶏冠石というのがこれに相当するか、と思われる。『名医別録』に「雄黄は武都の山谷、敦煌の山の陽に生ず」とあり、陶弘景はこれに注して「敦煌は涼州の西数千里にあり。近来紛擾し、みな石門・始興の石黄の好きものを用うるのみ。涼州黄の好きものは鶏冠色をなす」という。この涼州黄というのは、涼州産ということではなく、涼州において集散された敦煌の雄黄をいったものであろう。また陶注では宕昌の雄黄は武都のものより品質が劣るとし、『唐本草』は「宕昌・武都のものを佳となす」とする。

- [18] 『名医別録』に「雌黄は武都の山谷に生じ、雄黄と山を同じくして生ず」とあるのは、于氏のいう異種同産の数すくない例である。陶弘景はこれに「いま雌黄の武都の仇池に出づるものは、これを武都仇池黄といい、色すこし赤し。扶南・林邑に出づるものは、これを崑崙黄といい、色金のごとくして雲母の甲錯するに似たり。画家の重んずるところなり」と注している。崑崙黄における「雲母甲錯」という形状は、于氏のいうところと共通している。

雌雄の別については「雄黄は山の陽に生ず」(「呉氏本草」)および「山の陰に生ず、故に雌黄という」(「本草綱目」)との相異によるとされているが、科学的に説明できる

のかどうか興味のあるところであるが、于氏は「米沢論文」が指摘するように、塊状のものを雄、雲母状のものを雌とみている。

日本では植物質顔料の藤黄（第2節に後出）も「しおう」と読むので、藤黄を雌黄と書くことが多いが、誤用というべきであろう（『倭名類聚』はすでに10世紀にこのことを指摘している。一方、桑原利秀・安藤徳夫氏共著『顔料及び絵具』<sup>昭和47年改訂版</sup>では、藤黄を雌黄と書いている）。また『本草綱目』では雌黄の異名としてなにもみえないが、塩田力蔵著『東洋絵具考』（昭和17年）は雌黄を石黄の別名といている（同書89頁）。新しくは小口八郎氏『古美術の科学』（1980年7月）は「雌黄、石黄などとも呼ばれる」とする。

[19] 『炮炙論』に「雌黄の一塊重さ四両、拆開すれば千重を得ん、軟きこと爛金のごときものは佳なり」とある。重さの「重」と層の「重」とを掛けているのであろう。「四両雌黄、千層金片」の俗諺はこのあたりに源があるのではないだろうか。

[20] 土黄 『本草綱目』（巻10）に土黄の項がみえるが、産出地・別名などについては記載がない。しかし、人造法に関する記事があって、それによると砒石（ $As_2O_3$ ）を主成分としていて、石黄・雄黄・雌黄と共通する部分がある。同書に引く、独孤滔（<sup>宋</sup>）の『丹房〔方〕鑑源』には「土黄は雄黄より制す」とあるが、これも人造である。于氏のいう黄金石外皮としての土黄は、これらとはちがうものであろう。問題は于氏が土黄の成分を酸化鉄・水酸化鉄といていることで、そうだとすると黄金石の成分とはまったく異っていることになってしまう。これはどういうことか。

酸化鉄を成分とし、かつ用字の似かよった黄色顔料に黄土があるが、これはまた黄金石と結び付く要素はなにもない。あるいは于氏に誤解があるのかも知れない。

[21] 『名医別録』は「空青は益州の山谷および越崖の山、銅あるところに生ず」といい、陶弘景注に「いま銅官に出づるもの、色ももっとも鮮深なり」とある。また『唐本草』も「銅を出すところ、兼ねて諸青あり」という。

ここでまた「米沢論文」を参照しながら、空青・扁青・曾青について、先に産地を列挙しておこう。

### 空 青

六朝 益州（四川省成都市）・越崖（四川省西昌市）・銅官（陝西省同官県）  
・始興（広東省始興県）・涼州西平郡（青海省西寧市）  
唐 越崖・蔚州（山西省靈丘県）・蘭州（甘肅省蘭州市）・宜州（安徽省宣城）  
・梓州（四川省三台県）・揚州（江蘇省江都県）。

### 扁 青

六朝 蜀郡（四川省成都市）・朱崖（広東省崖県）・武都朱提（甘粛省寧県）・青蛉（雲南省大理県）。

唐 武昌（湖北省武昌）・朱崖・簡州（四川省簡陽市）・梓州・江州（江西省九江県）・林邑・扶南

### 曾 青

六朝 蜀中（四川省）・越崖・始興。

唐 蔚州・鄂州（湖北省武昌）。

以上のほか、前にも触れた李斯上奏文における「西蜀の丹青」の句からいって、秦・漢代にはやくも青色顔料を出していたことが知られる（「米沢論文」）。ただ益州の空青については、陶弘景によれば、越崖産をも含めて「益州の諸郡またあるなし。おそらくは久しく採らざるの故なり」とあって、南北朝には絶えたものらしい。これが『歴代名画記』のなかで採りあげられているのは、唐代になって復興されたか、新坑開発か、いずれとも解される。

[22] 塩基性炭酸銅のうち青色原料としては化学物質として青色炭酸銅（ $2CuCO_3 \cdot Cu(OH)_2$ ）、天然鉱物として藍銅鉱（<sup>アズライト</sup>）がある。日本では、それから造られる青色顔料を、一括して群青と呼ぶ（『古美術の科学』53~54ページ）。于氏が「赤銅鉱」というのは解せない。

[23] 空青 『本草綱目』（巻10）に、別名として楊梅青をあげる。もとより、その塊りの形状からきたものである。

『唐本草』に「銅を出すところ、兼ねて諸青あり、ただ空青を得がたしとなす」とあり、その貴重さは六朝時代でも同じであつたらしく、陶弘景は「〔空青は〕諸石薬中、ただこれのみもっとも貴し。医方はすなわち稀にこれを用う、しかして多くは画色に充つ。ことに惜むべしとなす」といい、貴重な医薬品が絵画に消費されることを慨嘆している。

[24] 饒州（江西省鄱陽県）・信州（江西省上饒市）。宋代に至って、この二州が空青産地として加わる。

[25] 蘇恭の『唐本草』に「いま蔚州・蘭州・宣州・梓州・宣州に出づるもの、もっとも好し」とし、なかでも「蔚州・蘭州のものは片塊大きくして色極めて深し」という。

[26] 扁青 『唐本草』は扁青を緑青とするが、李時珍はそれを非とし「いまの石青これなり。絵画家これを用う。その色、青翠渝らず。俗呼んで大青となす。楚（長江中下流域）・蜀の諸処またこれあり」という（『本草綱目』巻10）。

[27] 『唐本草』に「朱崖〔崖〕已南および林邑・扶南より舶上して来るもの、形塊大なること拳のごとく、その色また青し」といい、国内産としては「武昌のもの



のは片塊小にして更に佳し。簡州・梓州のものは形扁にして片を作し、しかして色浅し」とある。

[28] 曾青 李時珍は曾青を釈名して「曾、音は層。その青、層層として生ず、故に名づく」といい、「あるいは云う、その生ずるや実より空に至り、空より層に至る、故に曾青と曰う」という一説もあげている。

(『本草綱目』巻10)。

陶弘景によれば南北朝の当時、曾青は「ただ始興に出づるのみ。形累累として黄連(桑草の名) あい綴るがごとく、色〔と〕理ともに空青に類し、甚だ得がたくして貴し」とある。また『唐本草』は「蔚州に出づるものは好く、鄂州のものはこれに次ぐ」としている。

『歴代名画記』も「蔚の曾青」として特記している。なお、宋応星は曾青について「内側の空青の部分をとってしまってから、外皮を粉にして曾青とする」としており、藪内清氏は「空青は孔雀石、これの酸化した緑青が曾青である」と補足している(同氏訳『天工開物』〈東洋文庫〉344ページ)。

[29] 四川省を除くこれらの産地について、その歴史的な事情はよく分らない。

[30] 白青 『本草綱目』(巻10)には碧青のほか、その外観から魚目青の別名もある。

[31] 『名医別録』に「予章の山谷に生ず」とある。この予章は銅山のある浙江省竜泉県であろう。陶弘景注は「医方用いず、市に売るものなし」という。『唐本草』は白青は「陶氏いうところの空青」だといひ「これを研ぐに色白きこと碧のごときは、またこれを碧青という。画用に入らず」とするが、しかし「空青なきときはまたこれを用う」という。これに対して李時珍は、これはまちがいなく「石青の属。色深きものを石青となし、淡きものを碧青となす。いま絵彩家また用う」と反論している。

予章のほか、唐代では簡州・梓州に産した(『唐本』)。このほかには『本草綱目』が『范子計然』という未詳の文献を引いて「白青は弘農・予章・新淦に出づ」という。弘農は河南省靈宝県、新淦は江西省新淦県。現在は于氏の書く通り、辺境での産出が知られるにとどまる。

[32] 沙青 沙青という名称あるいは品種別けが、いつから行われたか分らないが『本草綱目』には記載がなく、あるいは新しいことかもしれない。

『天工開物』(巻中、陶甃(製陶)の付記)に「回青はすなわち西域の大青にして、美(馨)なるものはまた仏頭青と名づく」とあり、回青または回回青というのは回教圏からの輸入青ということから、仏頭青は仏像の頭を塗る

のに使用される青ということから付けられたものという(内藤匡氏『改訂古陶磁の科学』222~23ページ)。ただ、内藤氏はこれをコバルト顔料という。

[33] 塩基性炭酸銅のうち緑色原料としては化学物質として緑色炭酸銅(CuCO<sub>3</sub>・Cu(OH)<sub>2</sub>)、天然鉱物として孔雀石(マラカイト)がある。日本ではその諸緑色を緑青と呼んでいる(『古美術の科学』53~54ページ)。

[34] 石緑 『本草綱目』(巻10)は緑青を標記し別名として石緑・大緑をあげている。『名医別録』の陶弘景注に「これすなわち用画の緑色なり、また空青中に出で相い挾帯す。いま画工呼びて碧青となす、しかして空青を緑青と作す。まさに相い反せるなり」とある。南北朝ごろまでに名称の異動が起つたらしい。唐代になると、さらに「緑青は扁青なり。画工呼びて石緑となす。その碧青はすなわち白青なり。画用に入らず(『唐本』)」ということになり、名称がもういちど屈折した。これは同時代の『歴代名画記』にも「武昌の扁青上品の石緑なり」として貫かれている。

[35] 石緑の産地について『名医別録』以下書いてないが、『新唐書』地理志には碌青の貢地として宣州、碌として江州・鄂州(以上いずれも(21)参照)の名がみえる。北宋になると「いま韶州(広東省韶關市)・信州(6)参照」に出づ。その色青白、画工用って緑色を為ると『図経本草』にはみえる。南宋になると于氏本文にあるように、広西の右江流域が知られてくる。于氏のあげる雲南・広西・波斯・ビルマについては未詳。

[36] 銅緑 『本草綱目』は銅青を標記し銅緑を別名とする。

[37] 銅鉱の天然錆のほか陳蔵器の『本草拾遺』には「熟銅に生ずる、みな青あり。〈略〉銅青はすなわちこれ銅器上の緑色、淘洗してこれを用う」とあるように、銅器の錆がよく使われたらしい。こうした錆は桑原利秀氏によれば水分・空気・炭酸ガスの作用でできるもので耐久力はないという(『顔料』318ページ)。

[38] このような、酢酸銅を主成分とする人工緑青の製法は古代ギリシャの方法に類似しており、西方の技術が西域から中国に移入されたと考えられている。

(『古美術の科学』55ページ)。

[39] 白堊 これには白善土などの別名がある(『本草綱目』巻7)。北宋のころ京師開封では白土粉と呼んだと伝えられている(『本草衍義』)。白堊はまた洗濯にも使われたものである。

[40] 『名医別録』には1個所、河北省邯鄲県の名があげられているだけであるが、時代とともに産地が拡がったようで、明代までには到るところで採取されるよ

うになった(『本草綱目』)。

[41] 鉛粉 『本草綱目』(卷8)は粉錫を標記し、別名として鉛粉その他于氏があげたもののほか、解錫・鉛華・定粉・瓦粉・光粉・白粉・水粉などを列記する。陶弘景は『神農本草經』の粉錫に注して「すなわちいま鉛を化して作るところの胡粉なり、しかしてこれを粉錫というは、いまと乖うに似たり」というが、李時珍は補足して「鉛と錫は一類なり。古人鉛を名づけて黒錫となす、故に粉錫と名づく」という。また胡粉の名称については、さらに後漢・劉熙の『釈名』に「胡は罽なり。脂に和して以て面に罽するなり」とあるのを引く。罽はかゆ転じて貼る、塗るともなるから、顔に塗る白粉という意味で胡粉だというのである。しかし胡字をもつ多くの物資がそうであるように、西域伝来の白粉をいったものであろう。定粉は于氏のいう錠粉で瓦粉とともにその形状による名称であろう。

[42] ここに書いてある人造法は『天工開物』(下巻・14)に記載されている方法とほとんど同じである。これも酢酸銅による人工緑色と同様その先蹤がギリシャにあり、シルクロード沿線の胡人を通して東漸したと考えられている(『古美術の科』学58ページ)。

鉛粉の産地は六朝時代に南陽(湖南省辰陽郡)・唐代に始興(21)(以上「米沢論文」)および『新唐書』地理志(卷39)に衛州(河南省)・澶州(河北省清豐県)の名もみえる。南宋時代では『桂海虞衡志』に桂林(広西壮族自治区桂林市)があり、明代では金陵(江蘇省南京市)・杭州(浙江省杭州市)・韶州(35)(參照)・辰州(3)が知られている。金陵以下はひろくって呉越の地で、李時珍によれば「俗に呉越のものを呼びて官粉となす」とある。同地域に官営工場があつて、その製品を官粉と称したのであろう。これらとは別にもう1箇所、明代では嵩陽(河南省登封県)の名もあがっている(明・何「余冬序録摘抄」<『本草綱目』所引>)。

[43] 『本草綱目』(卷46)蛤蜊の項に、蛤蜊粉またの名海蛤粉というものがある。いずれも明人は略して海粉とか蛤粉と呼んでいたらしい。一方、李時珍の説では「海蛤粉とは海中の諸蛤の粉にして以て江湖の蛤粉・蚌粉を別つなり」とあり、いろいろな貝粉があつたらしい。于氏のいう蛤粉がどういう類のものか、なお未詳である。

[44] 『本草綱目』(卷9)の石炭に別名の1つとして石墨の名がみえ、李時珍の集解に「また一種の石墨あり。これを舐めるに舌に黏す。書字・画眉すべし。画眉石と名づくるものはすなわち黒石脂なり」とあるが、その属性の共通性から判じて于氏のいう黒石脂はこの黒石脂のことかと思われる。

また同『綱目』(卷9)に別に五色石脂の項にやはり黒石脂がみえ『名医別録』は潁川陽城(河南省登封県)の産地をあげているが、陶弘景注は赤・白石脂以外は「正用なし。ただ黒石脂は画用に入るのみ」とするだけである。

[45] 武陵 于氏はこの地を湖南省常德県としているが、米沢氏はこれを『図経本草』にいう湖南省辰州(沅陵県)とする(「米沢論文」)。ちなみに長広敏雄氏訳『歴代名画記』(1・122ページ)も常德県とみている。

[46] 磨嵯 于氏はこの地を福建省建陽県としているが、米沢氏は上記武陵の地とみている(「米沢論文」)。長広氏は常德の武陵の地域内とする(前掲書)。

[47] 蟻鉤・紫鉤 後出(第1章第2節)。

[48] 鹿膠・鱧膠・牛膠 後出(第1章第4節)。

[49] 漆姑の汁 漆姑草、和名「うるしけし」。『名医別録』に「蜀羊泉は蜀郡の山谷に生ず」とある。米沢氏は、その汁の粘着力の強いことから漆姑の名が出たのであろうという(「米沢論文」)。

[50] 阿膠 後出(第1章第4節)。

[51] 食竹 宋・陸佃の『埤雅』(卷11)に「莊子謂うところの騏・驥・驂・駟は鼠を捕うること狸(野猫)・狽(いた)に如かず。栗鼠これに似、蒼黒にして小。その毫を尾より取り以て筆を製すべし。世に謂うところの鼠鬚栗尾なるものなり。その鋒はすなわち兎より健し。栗鼠はいまの竹鼠(りゅう)の類のごとし。蓋し鼠は竹を食う、故に竹鼠という」とあり、小野勝年氏は「栗鼠(りす)の毛から製した筆」とする(同氏訳『歴代名画記』<岩波文庫>)。ちなみに『新唐書』地理志(卷40)に、房州(湖北省房県)の貢物として竹鼠の名がみえている。

[52] 『歴代名画記』の訳読には長広敏雄氏の訳本(『東洋文庫』本)を参照した。

付記 本書第1～3章については、すでに小口八郎・林功氏共著「唐代におけるトルファン・アスターナ出土文物の彩色の材料・技法について」(『東京芸術大学美術学部紀要』16・昭和56年3月)のなかに、化学的説明を加えながら抄訳されたものがある。その紹介は次稿以下に適宜行うことにし、本稿の分についてはそのいとまがなかったので、読者みずから併せ参照していただければ幸いである。